

地域の宝をみがく担い手たち

少子高齢化、人口減少が不可避となった日本の経済。なかでも広域性と人口低密度を特徴とする北海道は、これらの影響を顕著に受けやすい地域を多く有します。

これらに対処していく一つのあり方として、特色ある地域づくり産業おこしが北海道に求められています。(公財)はまなす財団は、平成26年度(平成25年9月～)から各地域において個性ある発展を図るため、地域主体で取り組んでいる地域づくり活動に対して、自立的な活動の継続的な育成支援を目的とした「地域づくり活動発掘・支援事業」を開始しました。

本年9月8日に札幌市で開催した「地域づくりシンポジウム2014」では、「里山資本主義」を提唱する藻谷浩介氏の基調講演を参考とし、パネルディスカッションでは、地域づくり活動発掘・支援事業の採択を受け、実際に地域づくりに取り組んでいる方々の活動を紹介、これからの北海道の地域づくりと産業おこしのあり方を検討しました。

基調講演

地域づくりに活かす里山資本主義の提案



藻谷 浩介 氏
(株)日本総合研究所調査
 部主席研究員

世界的に不足していく化石燃料や、減少していく日本の人口など、今後の日本の経済環境には厳しいものがあります。特に子供の減少と老人の増加は、日本の生産人口の減少につながり、地方においては一層の疲弊が懸念されます。これらを食い止め、可能な限り人口増に転じる一方策として、里山資本主義を提案します。

里山資本主義の定義はマネー資本主義を補完するサブシステムであり、お金を使用しない経済や、お金を使うときは地域内で循環することを重視しています。

具体的には、里山や離島にある金銭換算すると無価値の資源、例えば耕作放棄地、立木・流木、半端ものの農産品、さらに退職者や野獣等、マネー資本主義的には価値がないと思うものを数パーセントでも自給に使用して「ある程度の水と燃料と食料を自給しよう」というのが里山資本主義です。

北海道における実例として、外国人観光で落ちるお金を地域内で循環させ雇用を増やすとともに人口増につなげているニセコ地区のケースや、灯油燃料に代わる木質燃料で地域内を自賄する取り組みや、お金も地域内循環させている下川町のケースなどがあります。

パネルディスカッション

地域づくり活動団体の取り組み発表

～地域の宝をみがく担い手たち～ 発表1

天塩川河口前浜の食を活かす

天塩の前浜から水揚げされる魚の付加価値の向上や、有機野菜等の販路拡大から事業化、法人化につながる新たな食産業の創出と地域産業の活性化を活動の目的にしています。

天塩産カレイ等の水産物の首都圏へのプロモーションや、水産業を核とした産業連携の推進、地元漁師の出前授業、学校イベント等への参加、新たなマーケットに応じた商品開発とそれを実行する組織づくりへの取り組みをしています。一例として、酪農と漁業を基幹産業とする天塩町では、シジミは大きさや味で評価を受け、まちのシンボリックな特産品でしたが、今は環境の変化で最盛期の6分の1の100t未満に激減しており、多くの関係者と協力しながら復活



パネリスト
 米田 孝利 氏
天塩地域づくり活動発掘
 協議会

に向けた取り組みを行っています。

今後の課題と取り組みは、事業化及びビジネス化に向けて販路開拓、注文に対応できる工場の整備、ネットワークの継続とキーパーソンの存在等です。

発表 2

おらが島のブランド化に向けて

島根県海士町^{あましろう}の視察が活動のきっかけで、海の資源を活用して、自然、環境、食、島の人、これら全体による天売島のブランド化を目標に活動しています。海士町のサザエカレーを参考に、天売島アワビカレーの販売で自信をつけ、未利用資源のヒル貝（エゾムール貝）を活用したさまざまな試行や、観光的にもスキューバダイビングのモニターツアー等を行っています。なかでも日本一小さな生徒数8人の天売高校は、島の将来と活性化に大事な存在であり、その存続活動にも島全体で取り組んでいます。

天売島の活性化に向けた組織の法人化から、島内の未利用資源のビジネス化、また、天売高校の魅力向上といった、課題先進地の認識のもとで離島活性化モデルづくりの取り組みをしています。



パネリスト
齊藤 暢 氏
(一社)天売島おらが島
活性化会議

発表 3

インバウンド観光の活性化

羅臼町は流水が到達する最南端で、北方領土の国後島と並行する根室海峡は狭く、春は流水が運ぶプランクトンの増殖に海鳥が群れ、ヒゲクジラやミンククジラ、海獣のシャチが現れます。海が深く大型のクジラも現れ、80%の確率でマッコウクジラに遭遇できる8月から9月の観光船によるホエールウォッチングは、羅臼町の夏の観光の柱になっています。

冬は、流水とともにやってくるオオワシなどのバード



パネリスト
池上 美穂 氏
知床羅臼町観光協会

ウォッチングを目的に外国人の観光客が増えています。

冬季のバードウォッチング観光船利用客4,300人(2013年)のうち30%が外国人です。まちに来る外国人に対し町民には「私には声をかけないで」という英会話の恐怖があり、どうやってお客さまと慣れて接するか、指さし英会話帳作成や英会話教室の開催など、地域の英語スキル向上に向けて取り組んでいます。喜びや楽しさを感じ、安心して相手を迎えられるときに、冬季のビジネスチャンスだと認識が変わっていくのではないのでしょうか。

世界遺産である知床の麓として、バードウォッチングを主体としたインバウンド観光の活性化に向けて取り組んでいます。

発表 4

ご当地グルメを宇宙まで



パネリスト
藤谷 満伸 氏
大樹チーズ&サーモン
グルメ地域活性化協議会

大樹町は、漁港が二つある漁業のまちであり、また、牛が人口の4倍の2万5千頭いる酪農のまちです。生乳のほとんどが、町内にある雪印メグミルク(株)大樹工場で主要製品「さけるチーズ」になります。外のまちに触発されて大樹町でもと、仲間がご当地グルメに取り組みました。大樹町の地域食材であるチーズと鮭を活用したご当地グルメ、「チーズ・サーモン丼」を開発し、現在は町内5店舗で提供されています。

また、大樹町はJAXA^{※1}の関連で宇宙のまちなイメージが大きく、JAXAの宇宙日本食の公募にチーズの漬物を開発し、ご当地宇宙食として「スペースチーズ」を試験販売しました。ここに至るまでには失敗談も多いのですが、活動の勢いや町長も巻き込んで乗り越えてきた数々のトライは地域愛が根源です。

チーズ・サーモン丼はベストセラーよりロングセラーで、スペースチーズは賞味期限を延ばして商品化につなげたい。継続は宝なりです。

※1 JAXA (Japan Aerospace Exploration Agency)

独立行政法人 宇宙航空研究開発機構。宇宙航空分野の基礎研究から開発・利用に至るまで一貫して行う機関。

発表5

地域資源を活かして交流人口を増やす



パネリスト
別所 範一 氏
(一社) 積丹やん集小道
協議会

私たちの活動の開始は、町所有の建物「ヤマシメ邸^{※2}」が売られると聞いて、これを何とか残したいという思いで町長に相談したことがきっかけです。そのころ積丹町は財政が窮乏状態で、われわれが何とかやるしかないとの思いが、町や議会の理解を得て3年間の無償貸し付けを受けました。積丹町には鯨漁の衰退に伴って残された鯨番屋のほか歴史ある石蔵が多数あることがわかり、これを残してまちの再生につなげられないかという思いで始めました。

協議会組織にし、その後に法人化もしましたが、資金がないため、いろいろな公募事業の協力を得て、屋根をはじめ今日に至る修復保存に努めてきました。

また、9月には「ヤマシメ邸」の修復保存と活用の実績が認められ、町から無償譲与されました。

今後は、建物の修復と保存のほかに交流機能を拡充して、自然景観や海の食材等、恵まれた積丹の資源と連携した交流人口の増大を図り、地域コミュニティの活性化と観光による地域づくりの取り組みを進め、具体的にはフットパス手法による地域滞在型の観光客を増やしていきたい。

まとめ

藻谷さんからは地域活性化とは何かという提案をいただきましたが、最終的には人が誇りを持って住むことという話だったと思います。

皆さんの本日の取り組みは、それぞれ、観光、地域の再生、建物の再生、特産品の開発というように、藻谷さんの話では「外貨を獲得していく取り組み」「地域内の価値を循環させていくため地域の魅力を高める」話だったと思います。なかでも地域づくりの本職ではない皆さま方が活動しているということがすごく重要だと思います。自分が住んでいる地域で、それぞれ仕事があり、自分の仕事を存続させるためには地域が存続しなくては行けないのですが、行政に頼ることができなくなり、自分たちの仕事でもない何かを自分たちでやっていかないと、地域の活性化はできないのだという認識が、活動の一番の出発点でもあると思います。

そこが「地域愛」ということで、失敗もいろいろしながら、それでももう一回チャレンジしようということの原動力になっているのだと強く感じます。

各地域で活動される皆さま方のますますのご検討を祈ります。



コーディネーター
小林 国之 氏
北海道大学大学院農
学研究科助教



※2 ヤマシメ邸

積丹町内に残された鯨漁往時の建築物、鯨番屋の一つ。ヤマシメ福井邸は初代当主の福井重次郎が明治末期に建設した。建物内は福井家の住居部と雇い漁夫の空間に分けられ格式の差がつけられている。現在は鯨文化の伝承施設「鯨伝習館・ヤマシメ番屋」として整備が進められている。